「モリイク」は、コープ未来の森づくり基金が、森と人、森づくりと人をつなぐ目的で発行している冊子です。

編集後記

2008年に始まったあすもりの活動もいつの間にか15年目を迎えています。最初に植えた木々はもうずいぶん大きくなったし、ミズナラの苗にはドングリも実りました。思ったほどうまくいかない植樹地もありますが、ひとつの森が育つほどの日々を、あすもりは過ごしてきたことになります。

とはいえ森づくりは100年の仕事。まだまだ道を歩き始めたばかりで、私たちの使命は次世代にこの森づくりという仕事を引き継いでいくことにあるし、そこが一番難しいようにも感じます。

今回、「あすもりフォーラム2023」で気鋭の森づくり人たちの話を聞く中で、改めて森という存在の懐の広さのようなものを感じました。森を舞台にこれだけの活動の広がりが見えるわけですから、私たちが知らない「楽しいこと」がまだまだたくさんあるのでしょう。そうしたことを丁寧にひとつずつすくいとって見せることができれば、森は誰にだって魅力的な空間だとわかるでしょうし、世代を問わず行きたい場所にもなることでしょう。こういうところから、きっと森づくりは引き継がれていくのかな。そんなふうに思ったのでした。

モリイク vol.25　2023年4月発行
発行元/ コープ未来の森づくり基金

ミックス
責任ある木質資源を使用した紙
FSC® C014687
www.fsc.org
VEGETABLE OIL INK
この冊子は環境に配慮してベジタブルオイルインクと、適切に管理されたFSC®認証林およびその他の管理された供給源からの原材料で作成されています。

コープ未来（あした）の森づくり基金レポート

モリイク
MORI - IKU

森に行こう。
森で育とう。
森を、育てよう。

vol.25
Apr. 2023

みんなで考える
未来へのステップ

植樹の次のあすもりの目標は？

つなぐ COOP SAPPORO

北海道のあしたの森を育てる コープ未来の森づくり基金

コープ未来の森づくり基金は、組合員さんのノーレジ袋へのご協力で支えられています。

モリ✻イク

* contents *

*02 コラム 森づくりのトレンド
未来のための市民による森づくり

*04 特集 あすもりフォーラムより
あすもりは未来を夢見る

*08 ものの見方を買える はかり売り
トロッコ

*09 もっと樹のことを語ろう
大きな木の小さな物語

*10 森のキモイ・キレイ特別編
街と狐と人の関わり
どんな距離ならおたがいシアワセ?

*12 木育essay
木のキモチ

*13 Fの森の今を伝える
Fの森通信

*14 コープ未来の森づくり基金報告
札幌市円山動物園樹木調査 など

Starting Column
森づくりのトレンド

未来(あした)のための市民による森づくり

モリイクの23号でお伝えしたように、道内で森づくりに活発に取り組む方のご協力をいただき、2030年に向けての「あすもり」の方向性を検討し、「北海道の森と暮らしをつなぐ活動をひろげていきます」という大きな方針を定めました。新たな方向性のもとでの最初の取り組みの一つとして、昨年12月に、この方針をテーマとしフォーラムを開催しました。当初は全道の森づくり団体の参加交流の場を兼ねてと予定していたのですが、コロナが収まらず残念ながらリモート開催となりました。

フォーラムの詳しい内容は本号に記載されているのでそちらを見ていただくとして、ここでは私が学んだことを書かせていただきます。基調講演、3つの市民活動紹介、ディスカッションとそれぞれ深い学びを得ることができました。

発表いただいた皆さんに共通していることの第一は「敷居を低く」ということで、自然に親しんだり、森づくりに気軽に参加できる機会を提供していたことです。人々は森林に対して様々な関心や思いをもっており、それに寄り添って、人々を森に誘いかけることが重要なのだと思いました。

第二は、敷居は低いけれど「目指すことは深い」ということです。敷居を低くしながら、参加者の活動の中での気づきを大切に育て、より深い課題意識を持ってもらい、主体的に動いてもらうということを意識されていたと思います。そこでは、例えば里山を生かすシゴトづくりの中で、「何のための誰のための」活動なのかを考えるといった、生き方自体を問いかける深さがありました。あすもりは植樹などの入り口の活動をどう深めていくのか、コープ全体の、北海道全体の森づくり活動につなげていくのかを改めて考えたいと思いました。

第三は、結論を「急がない」ということです。私より二まわりも若い世代の人たちが、自分たちが理想・目標とすることに「自分が生きているうちには無理かもしれないが」と述べているのに対して、すごいと思いました。急がず、焦らず、人々の学びと気づきに寄り添っていこうとし、でも理想は揺るがせないという覚悟を感じました。老い先短く結論を急ぎがちなわが身を反省するところ大でした。

フォーラムで学んだことをもとにあすもりの活動をさらに発展させていきたいと思いますが、活動の深みをどう作っていくのかが大きな課題と思います。皆さんのお知恵をお借りしながら新しい方針のもとでの具体的な取り組みを進めていきたいと思います。また、今年度は森づくりに関わる様々な方々の対面での交流・意見交換の場を設けたいと思います。是非あすもりの活動に今度とも参加し、連携していただければと思います。

柿澤 宏昭
(かきざわ ひろあき)

北海道大学
森林政策学研究室 教授
コープ未来の森づくり基金 運営委員長

1959年神奈川県横浜市生まれ。北海道大学大学院農学研究科修士課程修了。現在、北海道大学農学部森林政策学研究室教授。持続的な森林管理を多様な人々の協働で支えるしくみづくりをテーマに研究を行っている。また、欧米、ロシアなどの森林管理政策にも詳しい。主な著作に『エコシステムマネジメント』(築地書館)。2008年より「コープ未来の森づくり基金」運営委員長を務める。

あすもりは 未来(あした)を 夢見る。

2023 あすもりフォーラムより

今、社会にどんな森づくりが求められているのか、気鋭の森づくり人たちからそのヒントをもらいました。

あすもりが目指す次のステージへ。新しい森づくりをみなさんで始めましょう。

2008年に設立して15年目を迎えるあすもり。この間、10万本以上の植樹を行い、革新的な森づくりを実践し、環境教育を含む広い視野での森づくりを社会に提案してきました。一方で10年以上の植樹によって植える場所の問題も出てきたことから、今までの大規模な植樹祭のようなものではなく、もっと違った森づくりの方向性が必要ではないか、という話が持ち上がってきました。

あすもりの使命として、森づくりの文化を育て、北海道の森を次世代に手渡していくために、これから何が必要になるのだろう？

そんなことを考えるために、2022年の12月7日に開かれたのが「あすもりフォーラム」です。このフォーラムでは道内外の気鋭の森づくり人が集まって、それぞれの立場から、今、社会と森がどうつながるべきなのか、という視点からあすもりへの提案を投げかけてくれました。

今回のモリイクではその内容をかいつまんで紹介します。そこから、あすもりと北海道の社会がどんな森づくりを進めていけば良いのか、そのヒントを探してみたいと思います。

「2023あすもりフォーラム」や「サツエキのナツヤスミ」の様子はYouTubeチャンネル「コープ未来の森づくり基金TV」で配信しています。ぜひご覧ください。

森づくりのトレンドと課題

この先、森づくりに大切なことって何だろう？

森づくりの来し方を振り返って行く末を占う。NPO法人よこはま里山研究所（NORA）の松村さんによる2023あすもりフォーラムの基調講演まとめです。

保護から管理へ 里山という環境の見直し

市民による森づくりは、里山という環境が見直されたところから始まったといえます。それまでの自然保護では、手付かずの自然こそ守るべき存在で、なるべく人の手を遠ざけておこう、木は伐らないで守ろう、という考え方でした。ところが、里山は原生の自然に劣らない生物多様性の宝庫であり、その里山が管理者の不在で荒れ果て、危機的状況となっていると認識されたことから、自然を守るために管理する、という考えが生まれてきたのです。

そこから都市部と距離の近い里山環境を保全する運動が始まり、市民が自分たちの手で里山を管理していく、という流れができました。里山が地権者だけのものではなく、みんなのもの、つまりコモンズとして捉えられるような変化が起きたのです。「NORA」の活動では、里山を守るだけでなく、その環境から生まれる恵みを暮らしに取り入れ、都市部の人たちと里山とのつながりを深めていこうとしています。

「生きがい」の森づくり、縮小へ向かう

こうした里山の保全と活用を「生物多様性国家戦略」などを進める行政が支援しはじめたことで、2000年代には森づくり団体やボランティアは大幅に増加しました。日本全国で森づくり時代が到来したのです。

しかし、2010年ごろには各地の森づくり団体の数は頭打ちになり、少しずつ活動は縮小していきます。これには「生きがい」を求めて森づくりボランティアに参加した定年退職した人たちが高齢化し、活動が続けられなくなったことや、定年後も仕事を続ける人が多くなったことなど、社会の変化が影響しているようです。そのことに資金不足なども加わり、森づくり活動の持続性、特に担い手不足という問題を生み出しました。

現在はあちらこちらで後継者や若手の参加者を増やす試みが行われています。神奈川県内では「ヨコハマレンジャーズ」という活動を通じて、興味のある若い世代の人たちと森づくり団体をマッチングさせています。しかし大多数の森づくりの現場ではこの課題は解決していません。

森づくりという「シゴト」

一方で2008年のリーマンショックや2011年の東日本大震災をきっかけに、変わらない政治経済から距離をとり、できるだけ自分たちで自給して生きていこうという自律的な暮らしへ向かうムーブメントが生まれます。自然を守る活動をボランティアではなく、自分たちの暮らしや社会をよりよくしていくための「シゴト」※にしていく傾向が出てきました。一方で、里山・森が起業や新規就農の舞台となり、マネタイズの面からの関心も強まっています。行政も自然の経済的側面に注目しつつあり、そうした活動に期待を寄せるようになっています。そのような見方は、生産主義・経済主義に囚われているように思われます。

森づくりを続けることの意味

森は「だれも拒まない」空間です。どんな人が来てもその人なりの役割と居場所を作れる、誰一人取り残さない社会的包摂、すなわち「コモン」の場です。今、何のために森づくりをするのか、お金のためなのか国のためなのか未来のためなのか、社会として改めて考える必要があるのかもしれません。

森づくりはその始めこそダイナミックな環境の変化を体験できますが、進めるにつれて環境は安定し、変化は小さくなっていきます。そこに「面白さ」を感じるのは難しいかもしれません。しかし豊かな感性で小さな変化に気づき、活動の質を深めていけることが、持続可能な森づくりには必要なのです。

今、都市で生活する我々には自然や森は遠い存在です。でも、その気になれば小さな自然の息吹や変化を感じ取ることは難しくありません。そうした感性をもつ人を増やすことで、きっと世界はもっと平和に、もっとあたたかくなっていくはずです。未来を育てる私たちの森づくりの目的はそんなところにもあるのではないでしょうか。

※「シゴト」と「カセギ」：内山節『自然と人間の哲学』ではお金のために労働することを「カセギ（稼ぎ）」、地域の自然と社会、自分たちの暮らしを維持するニンゲン的な営みを「シゴト」と呼んでいる。

松村(まつむら) 正治(まさはる)　NPO法人よこはま里山研究所（NORA）理事長

東京都出身。1999年から多摩丘陵の里山保全運動に関わり始め、現在までNPO法人よこはま里山研究所（NORA）の理事長として、まちの近くで里山とかかわる暮らし、里山をいかす仕事づくりを進めている。学術的な専門は環境社会学、持続可能社会論。社会学の視点から、地域レベルの環境と社会のあり方について取り組む。他に、モリダス代表、Life Lab Tama副代表、NPO法人森づくりフォーラム理事等。また市民協働の実績から、よこはま夢ファンド、ヨコハマ市民まち普請事業の審査委員を務める等、活動は多岐にわたる。

NPO法人よこはま里山研究所（NORA）　https://nora-yokohama.org/
モリダス　https://moridas.net/　Rangers Project　https://rangersproject.jp/

森と街をつなぐ、そのために必要なこと。

これからのあすもり、これからの森づくりに必要なことって何だろう？

気鋭の森づくり人たちによる提案です。

聞き手：柿澤宏昭

人と人、森と都市、人と森のつながりをつくるには？

犬島：私たちは植樹や育樹をしているのですが、もう植樹する場所も少なく、興味持ってくれた人に「もう植樹は終わりです」ということも心苦しいです。次にできることは何かなあ、と思うんですが、関心を持ち続けていける森づくりなどはあるものでしょうか。

足立：森という空間は、その気になれば無限と思えるほどの資源の宝庫で、そこに目を向け、行動に移せるかどうかが、これからの活動の分かれ目になると思います。「かわいい松ぼっくりだね！ 拾って飾ろう」というような小さなことの積み重ねと、森に対する学びがなるだけ多くのメンバーで共有されることが大事。森の“本当の”恵みを皆で“森で収穫”できたら素敵ですよね。

坂本：植えた木を植えた人が訪ねてどう育っているか見る、ということはしているの？

犬島：それはできていないんです。

坂本：できるだけそのプロセスに立ち会うというのが大事で、育ったり枯れたりということを一緒に体験していけるということが大切なのではないかと思います。

柿澤：植樹はたくさんの人で行くけど、育樹は関心のある人しか行かない、まだ広げられていないですね。そういうことは大切だと思うのでこれからも考えていきたい。

森に関わる入り口をどう作るかが大切かと思いますが他にはありますか？

坂本：参加者がなるべくリピートしてくれることを目指していますが、そのためには都市側にある団体と地域の受け手と一緒にやれるといいですよね。一緒に育てていくということができたら、お互いいかな、と思います。

麻生：これまでコープが目標を設定して組合員さんにやってもらっていたという形だと思うのですが、これからは場を設定してあなた方がやってみたいことは何か、ということを逆に聞くということがあってもいいかと思います。

下川町の事例で、みんなにやりたいことはないかと聞いて、馬を放牧させたいとか子どもたちを自然の中で遊ばせたいとか要望が出て、じゃあ試しにやってみようってなる。我々はその実現をサポートをする、という役割になることを意識して活動しています。サービスの受け手ではなく、社会を作る担い手になっていく。これは次の社会にもつながると思っていて、それを森を通じてやっていくことが大切だと思っています。そういう人たちのやりたいことが実現するよね、ということに気づいてもらうことが人と森の多様性を深めることにつながるのではないでしょうか。

松村：植樹は良いことだからと参加してもらっているが受け止め方はみんな違います。それについて一緒に考えてみるという場も大事だと思う。植樹を大規模でやってみることも大事だし、街の中であちこち森を出現させることも大事。森に来て関係が深まった人といろいろ話すことも大事。そうして人々の思いを聞いてみることが大事だと思います。

森は誰も拒まない、ということはとても大事なんです。森はいろんな人にいろんなチャンスを与えることができる。そういうチャンスをつくり出すためには、それぞれ抱いているものが引き出される場として森を活用するのがよいのではないでしょうか。

意識を変えるといったときに、その場で何かを変えようとするのではなく、一人ひとりに向き合ってその人が思っていることが何なのかをまず聞くことが大切だと思います。

犬島：みなさんの話を聞いて、大勢で森に行くより何人かでいって好きな木を植えてそれこそ観察していってみようかな、と思いました。樹種を選ぶところから観察していくことならまずはできそうかな。

参加者とのつながりについて意識していることは？

麻生：相手には相手の見えている世界があるのでそこをきちんと知ること、そのためには聞くこと、自分の判断を挟まずに聞くことを積み重ねていくことが大切なのかと思います。

坂本：自分が面白い、楽しい、大事だと思ったら、その人の行動は鮮やかに変わっていくものです。これからの市民活動はひとつの目標に向かって一枚岩で、ということじゃなく、外界の変化に対してフレキシブルに変わっていくことが持続性だと思うんです。植樹の数字にこだわるより、楽しいと思う気持ち、また来たいと思う人がいるということが大切です。

足立：森という“全体意思”に干渉してゆくことを仕事としていますが、それは自分の死後に結果が現れることの方が多いはずです。ゆっくりとしか変わらない。ならばやれることはただ一つ。自分が見つけたり、信じたりしているコト・モノ・技術をいかに明確な足跡、すなわち“その場”の記憶や記録、魅力として残して次に繋いでゆくか？ いつかは分からないが必ず現れる理解者をそこで待ち続けています。僕はそれは、“街や人々 ”の全体意思に対しても同じなのではないかな、とも感じています。

松村：コープはしっかりしているので人を何人集めるか、何本木を植えるかとかを大事にしていると思いますが、それ自体が成長主義、生産主義なのかなと感じます。それが本質ではないとみんな思いながらやっている。それが乖離しているのが今の社会なので、本音の部分で評価される社会に変わる必要があると思うんです。

足立さんが自分が死んだ後の世界のことをおっしゃいましたが、時間がかかるものという認識は大事です。時間を限ると焦る。評価しにくくなってしまう。自分で社会を変えると思うと大変になるし、とてもできない。時間に委ねることの恵みに気づくとがらっと変わって、人間関係もギスギスしないし森にも拒まれないし。そのことに気づくまでに経験が必要なこともあります。そういう経験をたくさんすることは大切だと思います。

柿澤：耳が痛いところがあります。あらためて咀嚼し直して考えていきたいと思います。

最後にあすもりにひとこと

足立：今ここはコンクリに囲まれた街ですが、一枚剥がせばもとの森。そういうことが感じられる遊びや話題にあすもりの活動が繋がっていけばいいなと思います。

坂本：従来のスタイルを変える力は企業は強い。世代もそうだがセクターを超えた協働が必要なのではと思います。

麻生：最近のSDGsなどは追い風だけど何か違うモヤモヤ感もあります。追い風をうまく利用して必要な場所に着地することが大切で、お互いサポートしつつこうして進んでいければと思います。

松村：社会は表面的な部分で変わってませんが、若い人たちは変化を自覚しているところもある。だから社会の枠組みが変わると中身も大きく変わる気がします。そういう予兆を信じて活動を続けたいと思っています。

犬島：とりあえず、楽しいことだけすることにしました（笑）。それが大事なんじゃないかな、と思います。

柿澤：みなさん、ありがとうございました。

お悩み相談

犬島 奈美（いぬじま なみ）　コープさっぽろ 東札幌地区 担当理事

あすもりが森づくりを行っている「Fの森」の森づくり活動を地区委員会で引き継ぎ、進めていくにあたり、どのような活動を展開していけばいいのかを模索中。このフォーラムでヒントが欲しい。

パネリスト（気鋭の森づくり人たち）

足立 成亮（あだち しげあき）　outwoods 代表

フリーの木こり。2021年から札幌市経営管理実施権（西区小別沢）受託、株式会社やまのかいしゃ役員として札幌の里山に関わる。人と自然の関わりを深める森林業が得意。札幌市出身。

麻生 翼（あそう つばさ）　NPO法人森の生活 代表理事

2010年下川町へ移住しNPO法人森の生活に参画、木材専門地域商社を設立したり、起業支援プログラムメンターを努めるなど地域に根ざしたさまざまな活動を行う。愛知県出身。

坂本 純科（さかもと じゅんか）　NPO法人北海道エコビレッジ推進プロジェクト 理事長

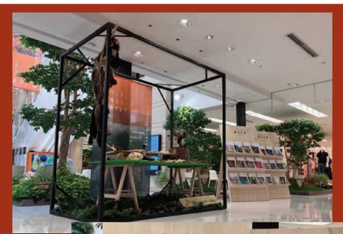
大学進学を機に北海道へ。札幌市環境局、NPO活動を経て、2009年にエコビレッジ活動へ。持続可能な暮らしと地域づくりや人とのつながりや分かち合うことを大切にした活動に取り組んでいる。東京都出身。

街に森を持っていこう 一つのカタチとしての サツエキのナツヤスミ in 大丸札幌店 2023/7/27 - 8/16

「街と森を近づける」を実践するoutwoodsの足立さんが関わるプロジェクトとして、大丸札幌店で行われたイベントが「サツエキのナツヤスミ」です。

大丸の6階ではあすもりがフィーチャーされ、モリイクのバックナンバーやあすもりの活動が素敵な展示で紹介されたほか、動物の毛皮や骨が並んだコンセプト展示も話題を呼びました。また、1階では木育のワークショップや物販なども行われ、あすもりと関わりのある森づくり団体がさまざまな体験を提供しました。

都会的で有名ブランドが立ち並ぶデパートの同じ空間で森に関わるイベントが開かれる。そんな街と森をくっつける試みは多くの人の関心を引き、この先にどんなことが起こるのか、楽しみになるシーンとなりました。



▲大丸1階では木育イベント。「えんりっと」の森に行きたくなるスプーンづくりの様子

ほかにも「ようてい木育倶楽部」の齊藤さんの木育ワークショップや、Fの森コーディネーターの山本さんによるヒグマを知るためのワークショップなど、連日森に関わるイベントが行われ、多くの親子連れで賑わいました。会場の様子はYouTubeチャンネル「あすもりTV」でご覧いただけます

https://www.youtube.com/watch?v=TlHpGXv1wnY

森のピタゴラスの体験。みんな夢中で遊んでいた▶

◀大丸6階で展開されたコンセプト展示とあすもり・モリイクの展示

まとめ ―あすもりの「未来の森づくり」を考える―

森づくりにおける市民活動の歴史や傾向を学び、気鋭の森作り人たちの話を聞いて、あすもりが向かう先が何となく見えてきたように思います。森と人のつながりが極端に薄くなってしまった今、コープさっぽろのように多くの組合員さんたちとつながりを持つような組織がその橋渡し役を買って出るのは筋の通った話にも思えます。植樹ばかりでなく、違う面から森を見て森とふれあう、そんな機会を皆さんに提供できるあすもりであったら良いなあ、と思うのです。

とはいえ、森づくりは100年の仕事です。今まで通り育樹などの作業も続いていくことでしょう。未来の森を子どもたちに手渡すために、これからの「森づくり」をしっかり考えていきたいものです。

札幌市内にある「space1-15」はクリエイターたちの出店が集まった、知る人ぞ知るショッピングスポットです。その一部屋で営業するのがはかり売りのお店「トロッコ」。お店を運営するのは阿部さんと下山さんのお二人。海外や道外への旅行で市場などに立ち寄った時、食材がそのままの姿で売られていることに「いいなあ」と思っていたと話すのは阿部さん。「はだかの食材が美しく、いきいきとして見えたんです。はかり売りはゴミも出さないし合理的で魅力的」。もちろん環境面でも「買い物のときにたくさんゴミが出るのがいやだったんです。だから、はかり売りを北海道でも広めたいと思いました」と下山さん。包装の問題には海洋プラスチックや資源・石油と、さまざまな環境問題が含まれています。

そんな思いに加え、多くの人と関わりを持てるパブリックな場を作りたいとの思いから、2017年にはかり売りのお店「トロッコ」を開店したのでした。

「トロッコ」で扱う商品は、自分たちが使っている食材や日用品を中心に、オーガニックな食材（乾物が中心）や、環境負荷の少ない日用品、フェアトレードの輸入品など。商品の向こう側にあるバックグラウンドを知ることで買った人のものの見方や環境への意識が変わる、そんな学びのある商品を意識して取り揃えているそうで、店名のコピーに連ねている「ものさし」にはものの見方を変えるものさしでありたいとの思いが込められているとのこと。ついでに、乾物は面倒というイメージがあるけど、水に戻しただけで食べられるものがあったり保存が効いたり、実は家事を楽にしてくれるおすすめ食材なのだそう。

昔ははかり売りが普通の時代もありましたが、今、環境意識の高まりもあって再び注目され、コープさっぽろでも一部の店舗で取り入れています。でも一般の消費者への広がり方はゆっくり。それでも「トロッコ」に来るお客さんからは、「以前は懐かしいね、っていう反応が多かったけど、最近のお客さんはいろんな問題をちゃんと理解して買い物に来てくれています」と、社会の意識が少しずつ変わっていることを感じるといいます。「こういう店が多くなって、はかり売りが当たり前になったらいいと思います」と、環境意識をもって買い物をするのが当たり前の世の中になることが目標なのだと話してくれました。

今回は森や木とは少し目線を変えてお伝えしてみました。身近な商品のことを深く考えると、その商品も生産者もその先の環境も、自分とつながっていることがわかります。それはきっと森づくりで森と自分のつながりに気づくことと同じ。自分が植えた木や、大切に作られた商品を通じて、他者とのつながりに気づき、それを大切に思うこと。ぜひ身近なお買い物を通して、みなさんも考えてみてください。

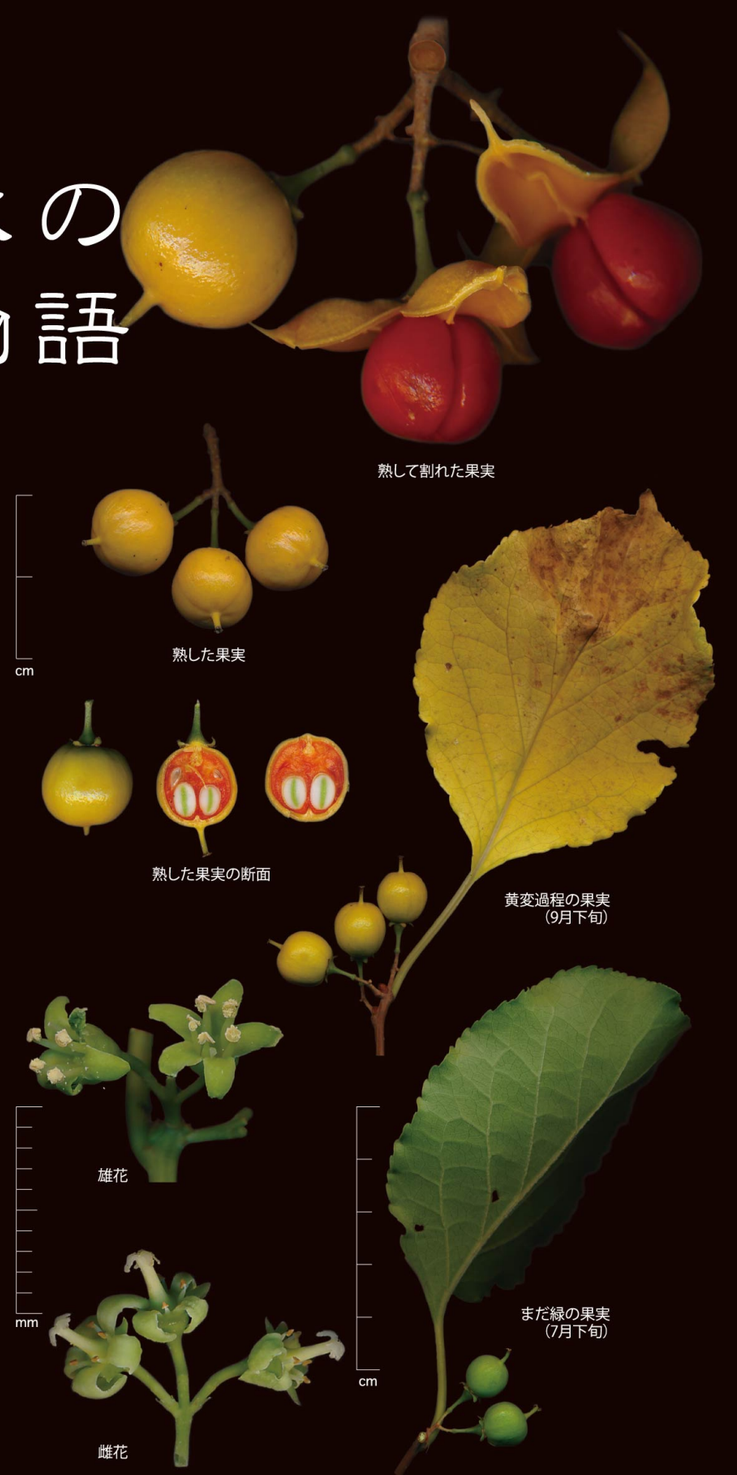
はかり売りの食材は乾物が中心（左）。忙しいお母さんたちにこそ使って欲しいと下山千絵さん（右写真・左）。阿部慎平さん（右写真・右）と建築事務所も経営し、地元の木材や間伐材を活用した長寿命・高断熱の家を手がけている。

札幌市中央区南1条西15丁目
space1-15・405
営業時間：土日 13〜17時

Column 植樹の図鑑 知っておこう。私たちが植える木にも物語がある。

大きな木の小さな物語

⑳ツルウメモドキ



ツルウメモドキはツル性の木本（落葉）で、近くの木に絡みつき、長さは20mほどになることもあります。札幌では初雪が降るころになると鮮やかな黄色に熟した果実（蒴果）が割れだして、真っ赤な仮種皮が顔を出します。リースの材料などに使われるので、多くの人が目にしていると思います。

名前に「モドキ」とつきますが、これは「何かに似ているようにつくられている」ことを意味しています。さてツルウメモドキは何に似ているのでしょうか？

頭に「ツル」がつきますから、ウメモドキという木のツル性ということが考えられます。さて、ウメモドキとはというと、本州・四国・九州に分布する日本固有種でモチノキ科モチノキ属の落葉広葉樹低木です。北海道にはありません。ウメモドキというのですから、ウメの何かに似ているから、ということなのでしょう。花は似ていません。葉の形がウメに似ているから、「ウメモドキ」と名づけられたのです。ではツルウメモドキも葉がウメに似ているかというとまるで違っていて、葉腋（葉の付け根）で真っ赤に熟している仮種皮の様子が、ウメモドキの赤い果実の付き方に似ているということで名づけられたといいます。「ウメモドキのツル性」などということではなかったのですね。ちょっと複雑です。

ツルウメモドキは雌雄異株です。ですから雄株にはあの真っ赤な仮種皮はつきません。雌株の雌花には、花粉はつけないけれど雄しべがあります。仮雄しべといいます。受粉するためには訪花昆虫を呼ばなければならないのですが、雌しべだけでは餌となる花粉がないので寄ってくれません。ある種、疑似餌のようなものとして、仮雄しべで訪花昆虫の目をひく作戦なのかもしれません。

真っ赤な仮種皮は鳥の目を引き、食べてくれます。種子は別な場所に運ばれ、糞として播かれます。我が家にもそうやってツルウメモドキが運ばれてきて芽生えたようです。

text/images 孫田 敏

‘54年山形県長井市生まれ。’77年北大農学部林学科卒業。林業、その後造園・緑化工事に従事。’90年から建設コンサルタント。緑化計画が専門。技術士（建設部門：建設環境）。
著書：アトリウムと植生（積雪寒冷地型アトリウムの計画と設計：絵内正道編著）、水辺林復元計画の基本的考え方と計画の進め方（水辺域管理―その理論・技術と実践―：砂防学会編）、森林管理と市民参加（北のランドスケープ 保全と創造：浅川昭一郎編著）
WEBサイト「Scan Botanica」http://scanbotanica00.sblo.jp

参考文献
斎藤新一郎,2022,北海道樹木図譜,665pp,北海道大学出版会　新村出 編著,1991,広辞苑第四版,2858pp,岩波書店
茂木透 写真,太田和夫・勝山輝男・高橋秀男ほか 解説,2000,山渓ハンディ図鑑4 樹に咲く花 離弁花2,719pp,山と渓谷社
清水建美,1995,ツルウメモドキ,週刊朝日百科　植物の世界39,4-89〜4-90,朝日新聞社

森のキモイキレイ 特別編

野生動物との距離を考える 4

野生生物と私たちは友達や家族にはなれません。
キタキツネの凛とした姿に憧れ、かわいさにほっこりしても
エキノコックス感染症という重大な病気の危険を持っているし、
人間の食べ物を与えると病気になることも。
自然の恵みの中、人に頼らずに生きる、**野生生物の尊厳**を大切にして
適度な距離で、同じ大地で健やかに暮らしていきたいものです。

北海道に生息する
アカギツネの亜種
キタキツネ

街(マチ)の狐(キツネ)と人(ヒト)の関わり どんな距離(キョリ)ならおたがいシアワセ?

写真提供：池田 貴子

北海道で出あう野生生物といえば、キタキツネを思い浮かべる人も多いはず。ネコのようなタテ長の瞳孔を持っていますが、イヌ科の動物です。

もともと人間のそばで暮らすのが上手で、昔話でもよく人里に登場しますね。最近ではさらに街の中心にまで活動範囲を広げる**「都市ギツネ（アーバン・フォックス urban fox）」**が増えてきています。街の中の公園や住宅地のそばに住み着くキツネもいるようですよ。

キツネのくらし

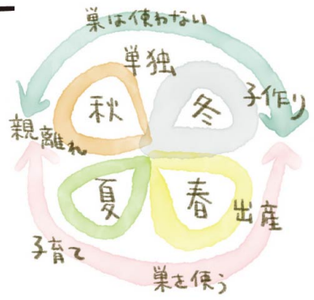
河川沿いの林や広い農地、大きな公園などに巣穴を掘ります。都市部では廃屋(はいおく)などを利用する場合もあります。
巣穴はトンネル状の迷路のようになっていて、出口が数カ所開いています。
巣穴はいくつか持っていて、時々引っ越したり、また戻ってきたりします。キツネにはお気に入りの巣があり、代々メスが受け継いで何年も使い続けます。

キツネは雑食

狩りが上手なのでネズミ、鳥、昆虫などをよく獲ります。畑や家庭菜園のトウモロコシや果物も。ゴミステーションもキツネにとってはレストラン。

キツネの生活カレンダー

キツネの子作りシーズンは冬。妊娠期間は約50日で春先に出産します。4月頃になると子ギツネが巣穴から顔を出し始めます。



家族単位でなわばりを持ち、夏の終わりには親離れします（メスはそのまま親のなわばりに残ることがあります）。

キタキツネから人にうつる! 寄生虫エキノコックス

エキノコックスはキツネから人にうつる寄生虫。人が感染すると5〜10年で肝臓に重い症状が出て手術が必要になることも。多くのキツネのウンコにはエキノコックスの卵が入っています。その卵を食べたネズミを飼い犬が食べて感染してしまうことがあります。　※人から人には感染しません。

専用の治療薬がない病気、予防が一番!

- 外で遊んだら手を洗おう
- 沢の水は飲んじゃダメ! 山菜や果実はよく洗うか、加熱して食べよう
- 土ぼこりを吸い込まない。卵が混ざっているかも
- ペットのエサやゴミはきちんと保管（キツネやネズミを寄せ付けない）
- ネズミを食べないように、犬の行動に注意!（放し飼いにしない。散歩やレジャーの際も注意して）

早期発見が大事!

感染の初期は症状がありません。野外での活動やお仕事をする人、キツネと触れ合ってしまった人、ペットからの感染が心配な人は、**保健センターなどで血液検査**をしてもらおう。

やめよう、餌付け! キツネとヒトの健康のために

餌付けのために野外に置かれたドッグフードやジャーキーなど

疥癬で死んでしまったキツネ。人間の食べ物が原因のひとつと考えられる

1. 人になれてしまうと…

人の近くで暮らすことになれると、人がエキノコックスに感染する危険が高まります。キケン!

2. キツネの体に良くない

人間の食べ物は野生動物には栄養ありすぎ。「疥癬(かいせん)」という皮膚病など、病気にかかりやすくなる可能性が指摘されています。
また、自分で狩りができないキツネになってしまったり、病気のキツネが生き延びて他のキツネに病気を広げてしまうことも。

3. キツネにあげたつもりが…

キツネのためのエサを、ほかの動物がねらっています。カラスやアライグマ、ヒグマも? ゴミの不始末も動物を呼び寄せることがあるので注意!

ベイト散布法・月寒での事例

実はエキノコックスをコントロールする方法があります。虫下し入りの餌**「ベイト」**を撒いてキツネに食べさせるのです。キツネや犬に害はなく、キツネに寄生しているエキノコックスだけを退治することができます。少量なので餌付けされる心配はありません。

札幌市豊平区の月寒公園でも、2021年の夏からこの「ベイト散布法」を開始しました。2022年12月までに公園内で拾ったキツネのウンコを検査したところ、エキノコックスの卵は発見されませんでした。継続しないと効果がなくなってしまうので、月寒公園では今後も月1度のベイト散布を続けていく予定です。

都市ギツネは、同じ街にすむ「おとなりさん」。ですが、人間に頼ることなく生きることのできる、独立した一個の野生動物です。エサを与えたりせず、「ああ、いるな」と遠くから見守るぐらいの距離感が、お互いの健康や安心にとってちょうど良いと思います。どんなに近くに住んでいても、キツネはペットではなく野生動物。コントロールは効きません。うまく共生していくためには、これ以上キツネを人間の生活圏に近づけないための、私たちの行動が大切です。交わらない。それも「共生」なんじゃないでしょうか。

キツネが友達だったころ

発行・監修 池田貴子
絵と文 石川芳夏・藤田諒子（北海道大学CoSTEP受講生）
子ギツネと人間の女の子の交流をとおして、キツネとのほどよい距離感や付き合い方について描いたファンタジーです。

お話を聞いた人

池田 貴子さん
北海道大学 大学院教育推進機構 CoSTEP 講師
1980年、神奈川生まれ、沖縄育ち。大学進学以来25年間、北海道民継続中。専門は都市部にすむキタキツネの生態学とエキノコックスの疫学。学生らと一緒に、都市ギツネにまつわる諸問題のリスクコミュニケーションにとりくんでいる。

morinoko

新岡薫／エトブン社
北海道のイキモノをテーマに絵と文を描いているイラストレーター。トカゲと鳥とエゾシカが気になる。猫とキツネを見たら追いかける。クモはちょっとコワい。好きなことは森と動物園と水族館の散歩。札幌出身。
http://etobunsha.com

宮本尚／きたネット
森好き、ヘンなイキモノ好きは、オホーツク海を眺めて育った子どもの頃から。最近はキノコのトリコ。シンガーソングライター、宮本尚Song-Gardenというバンドでライブハウスなどで演奏しています。
http://kitanet.org

木のキモチ

今、あなたの居られる所の窓辺には、どんな景色が広がっているだろうか。柔らかい日差しに誘われた芽吹きが、山々を踊るように彩る季節が訪れていたなら、そこに赤色を探してみてほしい。私がいつも真っ先に春もみじに気づくのは、若芽も花も鮮やかに赤いカツラの木から。遠くからでもそれとも分かる形の良い大樹が、生まれたばかりの春の生命を誇らしげに掲げて、木立の中にすっくりと立っている。

カツラの木には色々と面白い特徴がある。テフロンのフライパン、防水スプレー、ヨーグルトの蓋。これらの共通点は？ 答えはハスの葉やカツラの葉のロータス効果をモデルにして作られたということ。ロータス効果とは、葉の表面に小さな突起を持ち表面をザラザラにする事により、葉に付いた水を浸透しにくい水滴にして、水だけではなく、汚れや小さな虫まで一気に落としてしまおうという策略である。試しにカツラの葉にスポイトで水をたらしてみると、見事に丸い玉になる。ワークショップで実験をやった子どもたちも、面白い！ と、目をかがやかせた。

カツラの木の下に戻ろう。そう、カツラの木の愛らしいハート形の葉が黄葉する秋。カツラの木の根元に立って敷き詰められた黄色の木の葉のじゅうたんを踏みしめると、甘いにおいが鼻孔をくすぐる。焦がした麦芽という意味をもつ、マルトールという成分のせいらしい。人によって表現が違うのが面白い。キャラメル、しょうゆ煎餅、ハチミツなどなど。私にとってはバターとメイプルシロップをたっぷり塗ったほかほかのホットケーキのにおい。……どう、美味しそうでしょう?

においといえば以前京都の山奥で出会ったクロモジの木を思い出す。クロモジ、クスノキ科の落葉低木。ダークグリーンの幹に文字を思わせる斑点。茶菓子に添えられるスティックの通称にもなっている。樹皮の香りを残すため、皮付きで作るのだそうだ。

葉にも強いにおいがあって、精油やお茶の原料になる。当地の友人たちと葉を摘んで、屋外で湯を沸かし、摘みたてのフレッシュな生葉でお茶を淹れた。ミントと柑橘系の香りが立ち、カモミール茶のようなやさしい甘みがあり、持って行った洋菓子にもよく合った。

ところで、木がこうしたにおいをもつのはどういう意味があるのだろう。そして意味があるのならばにおいをもたない木があるのはなぜなのか。疑問の答えを見つけたくて、私なりに調べてみた。

どうやら木がにおいを発する目的はだいたい二つに分けられるらしい。一方は花。花の香りの目的は言わずと知れた受粉に必要な虫を誘うため。そして他方、葉や樹皮の香りは逆に虫を寄せ付けず、食害を防ぐため。どちらも木が生きて繁殖するために編み出した戦略なのだ。それならば、においのない木はにおいがないわけではなくて、人には感知できないが、虫には分かるにおいを発しているのかも知れない。そして、人間とは異なるにおいの好悪が虫たちにあるのだとしたら。私たちが受け取ったと勘違いしていたメッセージは、実は他のものたちに向けられていたのだ。

森に生きる木やそのほかの無数のいのちは、人の社会とは別の営みのなかにある。私たち人間はそれを肝に銘じ、生きとし生けるものへの深い理解と共感をもたねばならない。共生する世界を築き上げるために。

text / 齊藤 香里
介護事業所での管理職などを経て、現在は夫とともに『ようてい木育倶楽部』を運営し、木育の活動を行っている。介護福祉士、ケアマネジャー、木育マイスター。

Fの森から

森づくりを空から

「Fの森」の森づくりを支える川口さんの現場レポート、今回は上空から!

◀あすもりテラス上空からFの森全体を見渡す

●下草刈りが主な作業

前号でも森の手入れについて紹介させていただきましたが、「Fの森」では2020年から森の手入れとして下草刈りを重点的に行っています。昨年は対象エリア内の小さな苗木も見つけやすいように、ピンクのテープを結んだ4尺（120cm）の女竹を苗木の近くに目印として立てる作業を草丈が低い5月下旬に行った結果、ヨモギやセイタカアワダチソウなどの野草が人の腰や肩ほどの高さに成長する6月下旬〜7月の下草刈りも作業を安心して進めることができました。

●今年もしっかり下草刈り

今年も下草刈り作業が中心になりますが、もう一つの大切な作業として「Fの森」の玄関口ともいえるあかえぞ口やトレイル、カタクリの丘の広場などの草刈りがあります。特にトレイルは2012年からワークショップを開催しながら進めてきた各年度の植樹エリアを繋いでいるので、あかえぞ口に設置した全体マップを見て「Fの森」を散策していただくためにも大切なものです。トレイルの草刈りはみなさんに楽しくご覧頂くために夏過ぎまでに何度か行いますので、ぜひ「Fの森」を訪れてみてください。

▲「あかえぞ口」周辺。トレイルがきれいに整備されている様子

森の手入れの時には広い植樹エリアでの手入れのようすをドローンで撮影しています。今回は牧草地だった「Fの森」が緑あふれる場所に変わりつつあるようすをドローンの画像で空からご覧ください。

森づくり全般をサポート

写真と文：NPO法人
北海道市民環境ネットワーク
（きたネット）
川口 弘高

※ 道民の森はドローン（無人航空機）の飛行には申請と許可が必要です。あすもりでは石狩振興局森林室を通じて北海道から許可をいただき撮影しています。

みんなが注目! Fの森

JICAの研修生たちが「Fの森」にやってきた

11月3日、少し肌寒い風が吹く中「Fの森」に集まったのは国際色豊かな人々。この日は独立行政法人国際協力機構（JICA）による研修が行われました。研修を受けているのはアフリカ諸国、トルコ、ジョージアなどさまざまな国から北海道の森づくりを学びにきている10名ほどの皆さんです。

「Fの森」の、元にあった森を復元する生物多様性を意識した森を、市民がデザインから参画してつくる、というコンセプトに参加者のみなさんは興味津々。どんな狙いがあるのか、お金はどこから出ているのか、間隔や保守の施業はどうしているのか、など、熱い質問が飛び交う研修となっていました。

そもそも「Fの森」の森づくりが国外から注目されている理由は、海外からすると市民による森づくりというのは例がないからだといいます。また、植生復元や市民参画をテーマにした、つまり、生産林業を目的としない森づくりというのも珍しいのだそう。こうした「Fの森」が大切にしていることが、世界中に広く伝わり、研修に訪れた人たちの地元で役立つとしたらとてもうれしいことだと思います。

Fの森、2023

今年度の「Fの森」での森づくりが始まります。
コロナ禍で来られなかったみなさんも、
今年は「Fの森」でお会いしましょう。

Fの森 植樹会
札幌東地区委員会では **6月10日（土）** に「Fの森」での植樹会を予定しています。詳細は地区ニュースをご確認ください。

Fの森 ワークショップ
ワークショップとしては春の観察会や秋の枝打ち作業などを2回の活動を予定しています。詳細はあすもり事務局までお問い合わせください。

Event Report

組合員さんの、新しい森づくりへ。

森づくり団体交流

あすもりがこれまでの活動で作ってきた、たくさんの「つながり」を森づくりに生かしたい。という思いから始まった、市民団体や企業などさまざまな団体とコープさっぽろ組合員さんとの森づくり交流、今年も各地で独自色のある活動となっています。今回は2022年の秋に行われた交流の様子を2件レポートします。こんなつながりが北海道に増えて、森づくりの思いが広がっていくといいな。

南空知・石狩B地区

未来の森づくり
～育樹・周辺の植生観察～
at あすもり資料館

10月20日、秋の日差しが爽やかな日に集まったのは約30名の北広島・江別のエリア委員のみなさん。場所は江別市のコープさっぽろエコセンターの敷地にある「あすもり資料館」です。ここでは施設の周辺に2017年からNPO法人近自然森づくり協会理事長の岡村俊邦先生のご指導のもと、生態学的混播混植法による森づくりが行われています。今回は建物の南側での植樹と、5年目を迎える植樹地の観察会が行われました。

5つのスペースに別れての植樹では、岡村先生の解説を聞きながら作業を行いました。小さなかわいい木の苗が大きくなって森になるんだね、という会話を交わしながらの楽しい作業となりました。その後は今まで植えた木々の観察です。こちらも岡村先生のお話を聞きながら、5年前に植えた木々が背丈を越して予想外に大きくなっている様子に驚いたりしながら、森へと変わっていく姿をみんなで頭に思い浮かべたのでした。

あすもり資料館では今後も森づくりが続いていきます。みなさんもぜひ見に来てくださいね。

植えた木に愛着をもつとただの木ではなく特別なものに見えてくる。そんな体験のきっかけになるといいな、と思います。

本間 恵理子さん

室蘭地区

白老つれづれの森植樹祭
with ヨシキリの会

11月3日の白老は曇っていて寒い風が吹く、あいにくのお天気でしたが、13人の参加者が集まって森づくりの作業を行いました。「白老つれづれの森」はあすもりの助成団体でもある「ヨシキリの会」が管理する森で、室蘭地区では昨年から森づくりのお手伝いをしているとのこと。

今回は隣接する林地が伐採されてしまったために、森に風が吹き込まないように森を整備することが目的。人手はいくらあっても助かるので、地区委員のみなさんに加えてコープさっぽろ職員も駆け付けての作業となり、風の通り道をふさぐようにイタヤカエデやケヤマハンノキの苗を50本ほど植樹したり、ぶつ切りにしたヤナギを植え付けたりしました。また、せっかく植えた木々が食べられたりしないようにネットを張るための準備も手伝いました。最後には4～5メートルに育ったクリの木を記念に植えてしっかり汗をかきました。

植えた木々が育ってどんな森になるのか、また来年以降も見守っていきたいものです。

今回は作業中心でしたが、森で楽しい時間を過ごすイベントも考えていきたいです！

久保 由美子さん

Report

あすもり × 札幌市円山動物園

樹木調査 & マップ

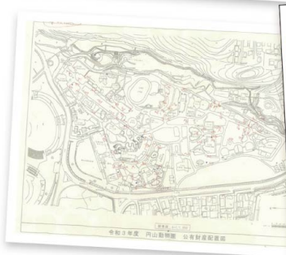
「どんぐりプロジェクト」を引き継ぐ
円山動物園コラボ、はじまりました。

札幌市円山動物園とのコラボレーションで行われた環境教育プログラム、「どんぐりプロジェクト」はその使命を終えましたが、プロジェクトで育んだつながりや植えたどんぐりたち（樹齢5年を超えました）を活用していきたいと考えていました。そんな中、動物園側からの提案があり、園内の樹木調査を2022年度から始めることになりました。これは、動物園の中に生えている木々を調査してマップに落としこみ、来園した人が動物だけでなく、植物たちにも興味を持って、森と生命のつながりに気づいてもらえるようにという試みです。

ちょっと本気の樹木調査ですので、「どんぐりプロジェクト」のようにいきなり一般の人と一緒にやろうというわけにはいきません。樹木に詳しい、「Fの森」コーディネーターの山本牧さんや、同じく「Fの森」の森づくり全般をサポートしてくれている雪印種苗（株）の木村浩二さんにも加わってもらい、さらに、マップ制作を見据えて酪農学園大学の学生さんや動物園の森ボランティアさんたちとの協働体制の下、2022年の10月10日と11月3日に調査が行われました。この2日で調査できたのはまだまだ一部に過ぎません。来年度以降も引き続き調査は行われ、結果はオンラインマップとして公開される予定です。

この調査はマップ作成だけでなく、樹木を使った新しい環境教育プログラムや違った方面のコラボレーションなど、いろいろな展開を考えているところです。来年以降のこのプロジェクトの動きもぜひチェックしてください。

11/3の樹木調査の様子。動物園の一般エリアの中に生えている木々について、樹種胸高直径などを記録しました。
来年度以降は円山動物園の森や「バタフライガーデンエリア」などにも調査範囲を広げる予定です。



調査記録の様子と、公開するマップのイメージ。
できるだけ細かい情報や、動物と樹木の関わりなどを掲載します。

Present

アンケート&プレゼント

「モリイクvol.25」いかがでしたでしょうか。今後の紙面づくりのために、アンケートにご協力をお願いします。

Q1 モリイクを読んだ感想をお聞かせ下さい。

Q2 面白かった記事・つまらなかった記事はどれですか?
右からそれぞれお選び下さい。

- 巻頭コラム（P2）
- あすもりは未来を夢見る（P3～7）
- 木づかい（P8）大きな木の小さな物語（P9）
- 森のキモイ！キレイ？ 特別編（P10,11）
- 木育エッセイ（P12）
- あすもりレポート（P13～15）

Q3 森づくりの活動に参加したことがありますか?（はい・いいえ）

Q4 コープ未来の森づくり基金の活動へのご意見があればお聞かせください。

Q5 取り上げてほしい記事のテーマがありましたらお書き下さい。

PRESENT!
アンケートに回答いただいた方から抽選で5名様に、森のキモイ・キレイのモリノコが制作する地中動物のトートバッグをプレゼントします。モリイク21号のキモイキレイも合わせてご覧くださいね。

応募方法
アンケートの回答を記入の上、住所・氏名・年齢・連絡先を明記の上、はがき、FAX、メールにてお送り下さい。
プレゼントの当選は発送をもって替えさせて頂きます。

応募締切　5/1（月）当日消印有効

コープさっぽろ基金事務局
〒063-8501 札幌市西区発寒11条5丁目10番1号
FAX: 011-671-7575
メール: csapmori@sapporo.coop

こちらからもメールできます